

建築デザインを介した生活空間支援の実践的研究

研究代表者 入江 正之
(創造理工学部 建築学科 教授)

1、研究課題

時代の変革期において、建築の概念も変化してきており、その自覚のもとに建築デザインを介して、社会における多様で、新しいニーズにどのように対応していくかが問われている。建築的遺構の修復・再生とそれに伴う街の活性化支援、地方歴史的都市の街づくり支援、また都市施設の多様な展開における宗教建築の今日的在り様、省エネ・省資源に対応した建築計画、さらに幼児・初等教育環境の空間的在り方などをキーワードとして、建築デザインが社会におけるニーズ動向に対応して、多様で、新しい生活空間要求に支援という視点で、実現できるかを、課題とするものである。

2、主な研究成果

2.1 人間生活遺構研究



九州、佐賀県鹿島市を対象に街づくり提案を行うとともに、江戸時代から続く酒蔵のある歴史都市である市のさまざまな研究を行ってきた。5年目に入った今年度は、「鹿島学研究報告会 - これまでの鹿島、これからの鹿島」と題して、鹿島の歴史と魅力のひみつから、産業遺構論 - 多様な産業を育む藤津郡 - ということで酒造りや隣町の窯業などに触れた視点から、人々を場所へと繋げる鹿島の祭りから、さらに鹿島の色をつくるものから等、幅広く研究成果を市のエイブル

ホールを借り受けて、100 数十人を越える市民にむけて講演会を行った。

2.2 Zプロジェクト



東京の主要幹線である青梅街道に面して建つ、8階建ての店舗、雑誌社の本社、集合住宅の複合建築の設計を行っている。外的な条件規制から決まってきたヴォリュームの、その表面を白い壁体のファサードとしてその輪郭や端部、さらに大きく切りこまれた中央開口部の周縁部をステンレスのプレート等で見切ること、薄く、くっきりとした面として街道に対峙して屹立させた。この建築が立つ場所を「都市の表象性」として現したかった。

もうひとつは街道に併行する街路面に対して、「青梅街道センターパティオ」と呼称する歩行者が足をとどめることのできる奥行き深い路地空間を、安らぎが感ぜられる間の空間として付加した。

2.3 漱石山房記念館

新宿区主催の「漱石山房記念館設計プロポーザルコンペティション」の一位作品で、現在実施設



に設計案をまとめたものである。

2.4 スペイン、カタロニアの伝統的石灰造民家マジアの修復・再生に関する研究



スペイン、カタルーニャ州の伝統的石灰造民家マジアの残存遺構について、タラゴナ県ファッチェス離村集落にある対象遺構A棟について修復・再生を行ってきている。今年度も修復・再生の第三ステージとして、A-3 住戸の西側から南側に至る擁壁的外部壁体の石積み作業を行った。石は崩落した壁体から採取し、バインダーの役割をするアルガマサは現地の粘土を使用し、砂、セメントは市場から調達したものをを使うが、オリジナルに近い制作方法を踏襲している。第三ステージの計画案に沿って、左官工ジュゼップの指導の下、昨年度に記録できた道具類を駆使して、2mに達する壁体を施工することができた。来年度は主要部に取り掛かることになるが、その背景ができたと考えている。



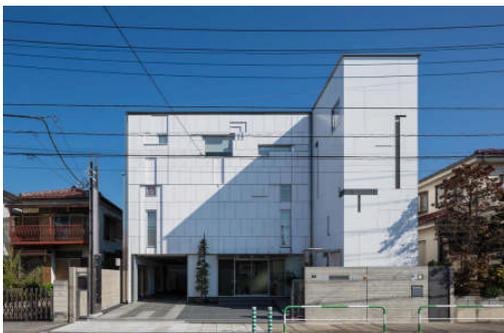
2.5 知久屋

惣菜売場と連携する、水平的な空間の広がり、イトインスペースに配された薄っぺらな布地の幟の垂直的空間を際立たせている。安東陽子氏に生地を選定をお願いし、薄い、切れるような質が空間にすがすがしさを与えることができたと考えている。

2.6 M寺

埼玉県川口市に計画された浄土真宗の寺である。都市郊外とはいえ住居地域にたつことの課題は、都市域に立地する宗教的心性を本性とする宗教施設の在り様である。宗教施設は、俗世とは見分けられた聖性の場所であって、建築的な内、外観は言うに及ばず、どのようにして精神性を持する空間を生成することができるか、が問われている。本プロジェクトにおいて、この課題にたいして建設すべき領域が限られていることを建築そのものの在り様に重ね合わせ、内、外部における“おさまり”の取り扱いに主題を絞ることで、現代の寺院施設持たなければならぬ性格を浮

き彫りにした。



3、共同研究者

小松幸夫（創造理工学部・建築学科・教授）
長谷見雄二（創造理工学部・建築学科・教授）
田辺新一（創造理工学部・建築学科・教授）
輿石直幸（創造理工学部・建築学科・教授）

s

4、研究業績（主要なもの）

4.1 建築作品

入江正之、和久田幸祐、入江高世、浄土真宗本願寺派 光輪山 明善寺、新建築 2014 年 9 月号、第 89 卷 12 号、p. p. 133~139.

入江正之、入江高世、和久田幸祐、早田大高、吉川由、新宿区立「漱石山房」建築設計プロポーザルコンペティション第一位、1914 年 5 月 23 日

4. 著作

川成洋、入江正之他著、マドリードとカステイリャを知るための 60 章、明石書店、2014 年 6 月。
入江正之、もっと知りたいガウディ 生涯と作品、東京美術、2014 年 7 月

4-3 論文

石垣充、入江正之、提案型設計競技の要項 - 提案 - 講評に関する研究、日本建築学会計画系論文集 第 697 号、p. p. 845~854、2014 年 3 月

4.1 招待講演

入江正之、吉川由、他院生 5 名 「早稲田大学入江正之研究室 鹿島学研究報告会 - これまでの鹿島、これからの鹿島-」 鹿島市生涯学習センターエイブル特別講演 2014 年 11 月 7 日

4.2 学術講演・講演

早田大高、入江正之 マジアの修復・再生における職人技術に関する研究 スペイン・カタルーニャの伝統的石造民家マジアの修復・再生に関する研究(8)、日本建築学会 2014 年度大会(近畿)、学術講演梗概集 9215、p. p. 429-430

山村健、入江正之 美学者ミラ・イ・フンタナルスの思想について(8) -アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究-、日本建築学会 2014 年度大会(近畿)、学術講演梗概集 9286、p. p. 571-572

吉川由、入江正之 歴史的な町並みを残す町の再生計画-九州の歴史都市を事例として I-、日本建築学会 2014 年度大会(近畿)、学術講演梗概集 9388、p. p. 775-776

人見将敏、入江正之 『ミラドール』紙投稿記事に見るカタルーニャ建築家らの建築思想について - 1930 年代カタルーニャ近代建築運動研究、日本建築学会 2014 年度大会(近畿)、学術講演梗概集 9436、p. p. 871-872

5、研究活動の課題と展望

建築デザインは社会動向（政治、経済、文化、生活等全般）に直轄に関わる事象であるがゆえに、常態が本質的に変容を旨としている。現在という状況は、ある傾向を不変として継続、維持しているとしがちであり、建築デザインの本質の様態を時間の急速な展開の内に見逃してしまいかねない。社会の動向にあるニーズを改めてとらまえ、建築デザインの概念を生活支援に向けて、常に更新していくことが望まれる。生き生きとした取り組む姿勢が必要とされよう。